

# 文化高知

'99年3月 NO.88



「花咲く頃」西村洋一

## 〈もくじ〉

横糸を紡ぐ	山崎一寛	2
音楽は愛だノ人間は愛だ!!	上田真二	3
「写真コンテスト・高知を撮る」の審査を終えて	和田健一	4~5
「バカ」でいいではないか	西一知	6~7
鏡村、高知、日本「外人の足で歩む」①	マイケル・カーン	8~9
まぼろしの「イタリア人」を求めて	石川啓子	10~11
山はスキーに温泉・キノコ(2) ~スキー登山の心②~	大森義彦	12
民俗雑記帖6	梅野光興	13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財) 高知市文化振興事業団



山崎一寛

「高知の文化」で特筆すべきものは何ですか、とケンガイジンに尋ねられたとき、ユニークな漫画家や優れた芸術活動を連想するには、しばらく時間がかかる。

私の脳裡にパッと思い浮かぶのは、盛り上がったお客(宴会)の様子である。粘りつくようできて、しかもさっぱりした独特のリズムをもつ土佐弁で、たわいもないことに口角沫を飛ばしながら、我を忘れて議論する。辺り一面日本酒のにおいが充満し、そこかしこで箸拳をやっていたりする。

「とにかく、高知は人間が面白い。人と人との絡まり合いが何とも言えない高知独特の文化です」と、適当な説明をすれば、多くのケンガイジンは、妙に納得してしまうのである。

ところが、その高知にも日本全体

を覆いつくす不穏な空気が流れ始めた。高度成長経済を経て、世界一の金持ち国となった日本で、私たちは何か大切なものを見失ってしまったようだ。連日報道される事件に、なぜだろうと考え込んでしまう。いや、事件ほどのものでなくても、日常生活の回りに、不可解な出来事が頻発する。隣同士あっさり話し合えば、五分で解決するはずのものが、第三者を間に挟んでこじれたりする。どうも心と心がうまく伝わってゆかないようだ。

子どもたちの世界を覗いてみても、おとなたちの世界が映し出されている。近頃の子どもたちは、人間関係を築くのに、おとなのように気を遣っている。学校から帰り、友達宅に電話して「遊べる?」とアポを取る。相手は、「〇〇ちゃんと約束がある

から今日はダメ」とか言う。

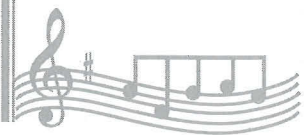
小学生なのに、具体的にどう遊ぶかを提案して、相手の予定が空いていないと、遊びは成立しない。プライベートを尊重するあまり、人間関係を結ぶのに非常に苦労している。結果として、人と人との関係をうまく結べない子どもたちが多い。これは、子どもたちに限ったことではなくて、驚くべきことに先生方も、いや一般のおとなたちもそうなってきたりするのかも知れない。

仕事上のやむにやまれぬ関係や全く私的な趣味のお付き合いは別として、それ以外の隣近所や地域の中での人と人との関わり合いから、できる限り逃げようとする。縦糸だけでは横糸がなくては、人間社会の機は織れない。

幸いなことに、近頃、行政や企業とは異なる新しい勢力としてのNPO(営利を目的としない市民活動団体)が市民生活のさまざまな分野で活躍を始めた。権力やお金ではなく、心の豊かさに価値基準をおいた市民たちが、人と人との繋がりを求めて、何らかの形で社会に貢献しようとする活動を開始したのである。ムラ社会的な共同体を無視し破壊してしまつた現代社会に生きる私たちは、

音楽は愛だ!  
人間は愛だ!!

上田真一



私は五十三歳になりますが、本当に強い人生だと思えます。男前でなく、天才のような才能も持っていない。その私が今、音楽家として、国内外で演奏活動ができています。

それは、チェロとの出会いから始まりました。小学五年生の時、薄暗い木造の講堂でサンサーンス作曲『白鳥』のチェロ演奏を初めて聴きました。まるで胎児が母の羊水の中

に包まれている気持ちになると同時に、雷が頭上から落ちて来たような強い衝撃を受け「自分の人生はこれだ!!!」と心の中で叫びました。その頃の私は、両親共に、小学校の音楽教師という家庭に育ちながら音楽は余り好きでなく、いつも喧嘩ばかりしていた問題児。ある大相撲部屋から誘いがあつたほどです。しかし「チェリストになりたい」と、目が凄く輝いていた。私の思いを両親だけが理解してくれ、翌日から音楽家への道が始まりました。



プエルトリコ音大卒業式で。左が筆者、その右がパブロ・カザルス氏



30年ぶりにプエルトリコを訪ねパブロ・カザルス記念館の前で(昨年1月)

今私がちょうど、その当時の両親と同じ年代になっていきます。親が子どもを愛する、信じるということの大切さを、両親から無言のうちに教えられていたことを、今しみじみと感じます。

運よく東京芸大の付属高校に入学。高校生活中より尊敬していたパブロ・カザルス氏のレコードを聴くたびに「カザルス氏にぜひ師事したい」との願望が日増しに強くなりました。二十歳になり、夢のような出来事が現実になりました。カザルス氏が学長をされていたプエルトリコ国立音楽大学へ留学でき、先生のレッスンを受けられるようになったのです!!!

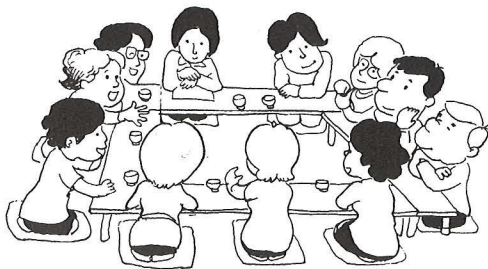
初めてのレッスンの日。当時九十三歳だった先生のレッスンが始まり、名器を弾き始めた瞬間、全く別人のように若々しく精気あふれる偉大な芸術家の姿が、目の前に輝いたのである。「音楽を愛し信じるように、人間を愛し信じています」と誰かに訴えるが如く、うなり声をあげながらチェロを弾く一音一音に、私は「この世の中にこれほどまで神々しく大きく、深い音楽の世界があつたのか」と涙が止まりませんでした。

十六年間の外国生活ではカザルス先生はじめ、各界の素晴らしい人々

新たな形で人間社会の横糸を紡がなくてはならない。

そこで、私たちは、人と人との関係を大事に育てるために、NPOの中核ともなるべき組織を設立した。その名をNPO高知市民会議といい、法人化をめざしている。今後は、公設の市民活動サポートセンターの運営に携わるとともに、さまざまなボランティアや市民活動団体にエールを送り、支援をしてゆきたい。人間王国土佐の復活を図るために。

やまさきかつひろ・高知市小中学校PTA連合会会長、NPO高知市民会議理事長



と出会うことができました。彼らに共通するのは幅広い人間性と常に謙虚な姿勢。そして『愛』、『誇り』には徹底的にこだわり、なかなか妥協しません。日本は縦横社会ですが、ラテン諸国特有の円形社会がそれらを育むのではと想像します。だから誰ともすぐアミーゴ(友達)になれ、友人を人生で最も大切にします。

私は、人生を、人間をこよなく愛する彼らが大好きです。人間の心、音楽、愛、人間(民族)の誇り等は目に見えないし、手に触れることもできません。しかし、空気が太陽、水と同じように、豊かな人生を過ごす上で不可欠だと信じます。大胆な言い方をすれば、お金で買えない物ほど尊いのではないかと思います。

早いもので帰国し十七年が過ぎようとしていますが、カザルス先生がレッスンの合間に語ってくれた「自分のふるさと、国を愛せない人間がどうして立派な音楽家、人間になれるのか」との言葉がますます私の胸の中で強く膨らんでいます。

この言葉の重みを感じつつ、『音楽は愛だ!人間は愛だ!!』の心情でこれからも演奏活動を続けたく思っています。

うえだしんじ・カザルス合奏(団代表)



「第十五回写真コンテスト・高知を撮る」の審査を終えて

この発見の楽しみ

和田健一

何回目かの写真審査をして気がかりなことがある。それは応募作品の一、二割ほどの数だが、この写真コンテストの狙いには相応しくない写真が、毎回必ず応募されてくることである。そうした写真の応募者にはたいへん気の毒なことだが、コンテストの主旨から外れるために選に漏れることも少なくない。漏れるのが惜しいような作品もあって残念でならない。花や風景などの写真である場合、記録性の希薄さに加えて、花なら花、風景なら風景の、いったい何を撮って何を表現しようとしているのか、それが審査員に伝わってこなければ選ばれないということになる。ただきれいな花だから、美しい風景だからだけでは「ああ、そう」という無感覚な言葉しか浮かんでこない。逆に、たとえ撮影技術や表現

技術が未熟でも、またモノを見る目の曖昧さがあつたとしても、貴重な記録性が結果として窺えれば、あるいは時代を感じさせるものが写っていれば選に入ることが言えると思う。

さて、今回特選に選ばれた「トンボ採り」と「ヘルプ」は共に魅力的な作品だが、準特選になった「筏引船」「寒中水泳」「鏡川川尻」「田村遺跡群」などは相拮抗しながら、さまざまな意見が出されていた。が、最終的にはだれもが納得できる特選二点が選ばれた。特選と準特選の作品との差は僅かである。また「竜王岬変遷史」は定点観測の組写真で面白いが、もう少し近寄って撮った方が良かったのでは、あるいは各写真の撮影地点がずれていなければもっと説得力が出たのではという意見

も出されていた。また準特選の十五点という数に縛られて、何点かの作品が入選になってしまったことも付記しておきたい。

特選に選ばれた「トンボ採り」は比島の丘や民家をバックに、瓢箪川に架かる木橋の上でトンボを捕っている子どもたちの姿が撮られている。七人のそれぞれの子どもたちの動きも自然で、戦前そして戦後の一時代までの高知市郊外のなんでもない風景だが、なんでもないものだから廃れてしまう、そんな特別なものでないものに思いを寄せる作者の目は優しいし、確かさを感じさせる。トンボを捕る七人の子どもが群れているのが懐かしいが、こんなふうにいる子どもたちは外で身体を動かすことをしなくなっている。

撮影時期は昭和三十二年ごろとい



力作が揃い、真剣な審査が続く

※4ページの下欄のとおり入選作品展を開催します。また、特選2点と準特選の数点については、次号から順次「文化高知」の中でもご紹介していきます。

登山を趣味としていますので、山野草、高山植物などを可憐に、少しでも美しく撮れたらと思って写真を撮り始めました。二年前から高知市中央公民館の写真教室に通っています。特選をいただき大変うれしいです。マイペースで楽しくゆったりと、少しでも永く撮り続けられたらと思っています。



「ヘルプ」で特選の  
濱田敬子さん  
(大津)

申し訳ないがもう一つ、タイトルの付け方が気になる作品があつた。準特選以上のなかでいえば、「ヘルプ」や「生きる」などのタイトル名の付け方はどうも感心できない。あくまでも個人的見解として言わせていただくが、前者は普通に「98年9月集中豪雨」とか、後者は素直に「点滴」とか「カンフル注射」とすることで、作品としてのインパクトが強くなるのではないかと。「新道路」なども、せっかくな写真なのに、題名があまりに素っ気ない。写真を撮って作品づくりを終わりにしてほしくない。タイトルの付け方次第で、作者の意



「トンボ採り」で特選の  
岡田文夫さん  
(十津)

写真を撮り始めたのは昭和三十年ごろですが、当時はあちこちと撮影に行きました。受賞作はそのころのもので、散歩の途中に偶然見かけた子どもたちを撮ったものです。仕事の関係でしばらく遠ざかっていましたが、四年ほど前から再び撮るようになりました。健康にもいいし、楽しみながら続けていきたいですね。

図がもつとよく伝わるのだから。入選作品のなかにもいくつか気になる作品があるが、一点だけ取り上げておくと、九反田の旧中央市場と戦後早くから埋め立てられて、もはや地図や絵図の上でしか想像できない横堀が写っている珍しい写真があった。写真の状態もプリント処理も良くないものだが、横堀が四つ橋からさらに南の現在の唐人町まで掘られていたことを知る人は少ない。作品を拝見していて、こうした発見があるのも審査の楽しみの一つである。

（わけけんいち・月刊「土佐」編集発行人）

第15回写真コンテスト・高知を撮る

入 選 作 品 展

「写真コンテスト・高知を撮る」の入選作（特選、準特選、入選作の合計68点）を展示します。いずれも作者の愛情の感じられる力作揃いであり高知の風景や生活を知る貴重な資料ともなっています。作者の方々の熱意を知っていただき、写真が語りかける高知の良さを感じていただけたら幸いです。

- 日程 3月12日（金）～3月22日（月）
- 時間 10：00～18：00
- 場所 市民フロア（はりまや橋・デンテツターミナルビル5階）





# 『バカ』でいいではないか

## 高知の前衛精神と高知からの発信

西 一 知

「高知県人の特徴は、一言でいうと何だろうか?」、私はそう聞かれるたびに、最近はためらうことなく、「それは、アヴァンギャルド、前衛だよ」と答えることにしています。

### 前衛とは翔ぶ精神

前衛、この言葉は文学や芸術の世界では戦後よく使われてきて、私自身もこのラインですつとやってきたのですが、しかし私は、単に新奇なもの、変わったものがすべて前衛だとは少しも思いません。

本物の前衛とは新しい物の見方、視点にあるのであって、すなわち形になる以前のその人の感性、意識、思考のなかに、それはすでにその人の生き方としてなければならぬ、私はそのように思っています。前衛は、とりたてて詩や芸術の分野に限ったものとは思っていません。

従って、前衛とは人間がかかわるすべての世界、政治、産業、文化、社会全般、日常生活のすべてにわたって、常に、またこれから先もあり得るものなのです。

前衛とは、形のうえの問題というより、人間精神の在り方だ、といったほうがより適切だと思います。つまり、伝統の因襲や、常識に捉われ

神と、スペインからの発信」というふうに見ているのです。  
スペインの風土性と人間は、なぜか奇妙に高知と似ているようにも私には思えるのですが、皆さんはいかがでしょうか。

「高知の前衛精神と、高知からの全国発信」、この最たるものは、明治初期の土佐の自由民権思想とその運動であった、と私は常日ごろ思っています。「自由は土佐の山間より」、私にとってこれ以上に素晴らしい座右の銘はありません。

高知の前衛精神は、しかし、なに

もこのような歴史の一ページを飾るだけで終わるものではなくて、もつと私たちの日常生活のなかに、いまでも失われることなく脈々と続いているものではないでしょうか。

### 発信とは魅きつける力

一九九〇年初夏、私は三十余年の東京生活に終止符をうち、高知に帰ってきました。電車通り、帯屋町と歩いているうちに、まず女性たちのファッション感覚の斬新さ、自由さ

私が長年住んでいた東京の新宿よりはるかに翔んでいる、帯屋町はまるでファッションロードだ、と思っただけでした。高知は太陽光線がきついで原色も平

ず、自由な発想のもとに新しいものを生み出す、これが前衛だと思えますが、その根底には、どんなに抑えても噴出する生命の躍動、好奇心、無意味な形式や、権威への反発、といった、生への基本的な欲求の激しさがあることを、見逃してはならない



高知から全国発信している「よさこい祭り」。全国各地へ飛び火している

気かもしれません。それにしても、これは高知の女性の感性、意識の新しい、自由さではないか、とひそかに思ったことでした。  
そのうち、彼女たちは他県人橋本大二郎氏を高知の知事に推し挙げたから、すごいです。これは、まさに前衛ですね。

その夏、私が最も注目したのは「よさこい祭り」でした。その新しさ、好奇心、自由さ、そして何よりも燃える情熱、私はそれに熱中、共感しながら、この前衛精神、パワーがあるなら高知県人はまだ何でもやる、と思ったほどでした。これはいま北海道へ、全国各地へと飛び火しています。まさに「高知からの全国発信」の好例でしょう。

高知の前衛精神、これは高知県人の新しがり屋、好奇心、自由への欲求、情熱、これらと不可分と思えますし、さらにはそれが、この南方の辺境の地という地理的風土性とも深い関係があるはずで、その根は私たちの血のなかにある、と私は感じるのですが、皆さんはいかがでしょう

しかし、前衛には欠点もいろいろあると思います。おっちょこちょい、見せたがり屋、おだち、独りよがり、無責任、軽薄、バカ、常に未完成、

線香花火、こういう非難も聞こえます。

しかし私は、いいではないか、それが本当にやりたい、自分にとっての必然であるなら、いつかは人も寄ってくる、ピカソ、ミロ、ダリも最初はそういわれたし、植木枝盛、牧野富太郎、幸徳秋水、下八川圭祐、手島右卿、こういった人たちも、それに耐えてわが道を行ったのではないのか、とことんやるしかないのではないのか、といたいのです。

いま、高知から何を発信するか。風物か、新製品か、イベントか、人か、私は大きな観点では結局人ではないか、と思うのです。土佐人そのものの魅力、小手先ではなくそれに全国の目を向けさせる、私はそういう思いでいま、二十三年前に東京で創刊した全国対象の季刊同人詩誌「舟」を、高知から発信し続けています。

この春は、日本ではまだ全く知られていないが、おそらくは現代世界最高の詩人と「舟」がマークする、エストニア在住の詩人ヤーン・カプリンスキーの詩集を高知の出版社から、本邦初訳で全国に発信しようとしているところです。

（にしかずとも・詩誌「舟」  
発行レアリテの会代表）

高知市制100周年の記念施設として建てられた自由民権記念館。正面に「自由は土佐の山間より」の碑がある。裏面には「植木枝盛『無天雑録』より集字」とある





## “鏡村川口橋、高知、日本”

# 外人の足で歩む Part 1

by マイケル・カーン

鏡村川口橋、高知、日本。自動販売機の前で、僕はコココーラを飲んでた。

不思議だなあ。どこの国に行っても、みんなコココーラを飲んでる。カンのラベルを読んでみた。「●原材料名 糖類（果糖、ぶどう糖、糖液糖、砂糖）、カラメル色素、酸味料、香料、カフェイン」

僕はマイケルと言います。「外人」と言われるけど、日本でだけそうというわけでもない。アメリカでも外人だったし、その前の台湾でも僕の親戚は全員外人だった。

「外国人」というわけでもない。「国」なんて、僕の祖先にはなかった。

お父さんの話によると、僕のひいおじいさんは、中国と台湾の間に散らばる何百もの島々の一つで生まれた。どの島なのか分からない。

分かっているのは、ひいおじいさんは小さな船に乗って台湾に着いた時点から「外人」だったということだ。

「今でも我々は『外から来た』と近所に見られている」という話を聞いたことがある。

自動販売機の前に車が停まった：

いそうで、「まあ、アメリカ合衆国ぐらいの歴史はあるろうね」と笑っていた。冗談抜きで本当にそうなんだろうなあ、と思った。

僕が生まれ育ったところは、アリゾナ州のフェニックス郊外の新興住宅地だった。アリゾナでは、私の両親も、友達の両親も、ほとんどの人々がどこから引越してきた人たちだった。

僕の家のある場所も、もともとは

農作地だったが、アリゾナでは家族経営の農家はほとんど大企業に吸収されてしまっ、大農場を見ることはよくあるが、「お百姓さん」という人は一人も知らなかった。

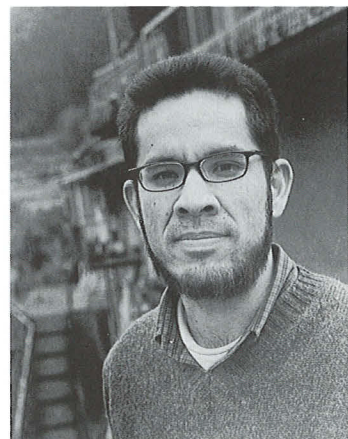
先日、鏡村の成人式の取材で一人の農家の青年にインタビューした。彼は言った。「この前テレビで見たけど、アメリカの大農場では、お米の種を飛行機でパラパラと落として蒔きよった。日本人的な考え方も

しれんけど、やっぱり自分の手で植えていくこと。農業はこうあるべきだと思っ」。

なるほど、二百年しか歴史のない国が、何千年もの歴史を持つ国から教わることはたくさんあるはずだ。

そう言えば、植

鏡村川口橋、高知、日本。  
ここでコココーラを飲んでた



マイケル・カーン

27歳。アメリカアリゾナ州から高知に来て6年目。3年前から鏡村役場の総務課で「鏡村広報」の制作を一人で担当しています。市町村の広報担当者としては日本で唯一の外国人です。

今号から3回にわたって「鏡村川口橋、高知、日本・外人の足で歩む」と題して、高知での6年間の体験やその思いについて綴っていただきます。

。あつ、植田さんや。

僕と鏡村の人たちは、なじんできたような気がする。植田さんは役場の同僚で、友人の一人である。

「コココーラの原料って読んだことある？」。改めて一緒にカンのラベルを読んでみた。

植田さんが言った。「私はあまり飲まんけど、息子と友達がソフトボールの練習の後に、飲まんとおれんみたいやね。そう言えば、やっぱり本場のアメリカ人はすごく飲むでしょう？」。

そう言えばそうやった。朝でも夜でもガブガブ飲んでた。しかし、植田さんの子どもたちのことがちょっと気になる。一昔前はなかった習慣なのに、今は「飲まんとおれん」状態だとしたら、このことは一世代だけで起こった非常に大きな変化で

田さんが作っているような山菜も、同じような植物がアメリカの山にも生えているのだから。でも、「ただの雑草と思っでいて、食べられるということを知らない」。

何千年も一つの島国で生存し続けてきた日本人。「米の文化」というぐらい食文化の伝統がある国。これからやってくる二十一世紀において、この土地で培われてきた知識、その中に人類の存続のためのヒントがあるのかもしれない。

何年前か前、僕は自分のルーツを探しに台湾のすぐ北にある、僕のお父さんの生まれた村まで旅をした。台湾語も中国語もしゃべれない僕が、やっとその村の標識を見つけたとき、一番最初に目に入ってきたのはセブン・イレブンだった。一瞬戸惑ったが、その店に入り、何となくコココーラを買って飲んだ。

そして、この鏡村川口橋でその村で飲んだコココーラを思い出していた。あの村はどうなっているのだろう。そして、鏡村はどうなっているのだろう。

かつて四千人に近かった人口が今では半分以下に減り、このままでいくと鏡村の歴史、伝統、文化、こういったものはだれの目にも触れなく

あり、興味深いことやなあ。

高知に来たころ、数々の高知の観光所に行った。その中で、僕が一番感動したのは大杉の木だった。三千年前からの生き物が、今でも生きている。一度中国人の友達と一緒に行ったとき、「三千年って……。中国の文明が始まったときじゃない？」と尋ねてみた。すると、「いいえ、中国文明の歴史は五千年です」と誇らしげに言われた。

僕は思わず大杉の周りの小さいフェンスを飛び越えて、木の幹を触った。三千年生きてきた木の根っこはどれぐらい深くまで伸びているのだろうか。

植田さんの家では、米、ミョウガや、フキノなどの山菜を作っている。何世代前から鏡村にいるか分からない。

なってしまうのかもしれない。

鏡村の存続……。人類の存続……。世紀末だからこそ、何となく連想してしまう。そして大杉の木について一つ気になることを思い出した。木が病気になるかかって、幹の中心が空洞になっていて、倒れてしまわないように銅板を張っていたことだ。老衰とはいえ、三千年生きてきた木が、なぜ、今、病気になるってしまったのだろうか。

僕は、たまにひいおじいさんのことを思い出して、彼はどうして「無名島」から台湾へ渡ったのだろうと考えることがある。多分、生活のため、生き残るために渡った、と言えるのかな。

彼の人生をたどることしか、今のところ僕のルーツを知る手だてはない。いつか彼の生まれた島を探してみたいと思うが、それまではどこにいてもしっかりと外人の目で見つめていたいし、外人の足で歩んでいきたい。

二千年をどこで迎えたいのか、これはアメリカではちょっとした話題になっっている。以前は、特に思いはなかったが、僕はだんだんと鏡村で迎えたいと、思い始めた。

（鏡村役場総務課広報担当）



# まぼろしの「イタリア人」を求めて

石川啓子



テレビのスイッチを入れてみよう。今や「イタリア」を目にしない日はない。新年早々、NHKでは三日連続の特集を組んでいたし、毎週日曜日、中田はサッカーボールを蹴り、ペルージャの町で味つきらしい水をおいしそうに飲む。何やら早口のおばさんがイタリア料理の作り方をまくしたてたかと思えば、イタリア語講座の先生が「マンジャーモ」とハンバーガーをパクリ（えっ、イタリア人がハンバーガー？ まあ、いいか）。どうも日本中がイタリアを大好きになってしまったようだ。

太陽の国イタリア。陽気なイタリア人。ミケランジェロにラファエロ、パヴァロッティ、フェツラーリにアルマーニ、分野を問わず、イタリアファンならずともどこかで聞いたことのある名前がゴロゴロしているに違いない。なるほど「イタリア」は、CMにもうってつけのキャラクター



なのかもしれない。

ところで私たちが一般的にイタリアあるいはイタリア人に対して抱いているイメージ、陽気でおしゃべり好きで、遊び好きで、女の目に

なくて……。果たしてこれは当たっているのだろうか。

去年、私たちイタリア同好会・高知では何人かのゲストをお迎えする機会があった。その内の一人、イタリア大使館の科学担当参事官、エッ

ラーニ氏とお会いした時、私が「最近はまだイタリア大人気でですね。イタリア語を勉強する人も増えて、イタリアはジローラモさん（NHKテレビイタリア語講座の名物講師。今までにない一般受けする番組構成で教育テレビの語学番組としては破格の視聴率を上げた）に感謝状を贈らなければなりません」と言うと、ちよつと困ったような顔をして意外な答えを返してきた。

「うん、でもね、我々イタリア人の間では不評なんだよ。彼のイタリア語はちよつとおかしいよ。それにあんなに女の口にベタベタして……。イタリア人が皆あだと思われちゃ困るんだよ」。同席していた香川大学の研究者、マーニさんも「そうそう、それにあのアクションも変だよ。ほくだつて見たことのないジェスチャーをイタリアではこうする、と教えられてもねえ……」と

相づちを打つ。

彼らは北部と中部の出身。ジローラモさんは南部の出身。イタリアと言ったついでに百年ほど前まではそれぞれが独立した地方国家だった。地方によって言葉も違えば習慣も文化も違う。そして皆自分の町が一番

だと信じている。例えば極端だが、明石家さんまさんがイタリアで日本語講師をしているようなものかもしれない。そう考えれば彼らの不満も納得がいく。後日やはりNHKのイタリア語講座を担当している大学の先輩にこの

話をすると「だけど、ジローちゃんも気の毒なんだよ。だってプロデューサーがそうやっていうから……。ああ、そうか。あのテレビで見るジローラモさんは、実は私たち日本人が創り出した私たちの望むイタリア人だったのだ。

それでは本当の「イタリア人」とは一体何なのか？ 同じ日本人でもあなたと私では全く考え方が違う。イタリア人になつて無口な人もいれば偏屈な人もい。そもそも十把一

からげにして、〇〇人はあだ、こうだというのは無意味なのかもしれない。が、それでも一般的な傾向としていかにも〇〇人らしい何かを感じずにはいられない。そこに私たちは自分たちに無いものを見つけて、ときに憧れを抱き、あるいは嫌悪感を抱いたりもするのだろう。同じ側面を見て「イタリア人は怠け者」と言ってみたり、「豊かな生活を楽しんでいる」と言ってみたり。私自身が感じたイタリアの魅力は何かと問われれば、「確固たる自分自身へのこだわりと、他人のそれを認めめたことによる多様性」と答えた。だから自由な発想が生まれ、様々な分野で想像力溢れる仕事ができるのだと思う。いや、こんな紋切り型の感想はすっかり忘れて、皆さんご自身にイタリアを見つけていただくでしょう。きつといういろいろイタリアが見えてくることだろう。少し教訓めいたことを申し上げ



同好会主催のイタリア旅行中にフィレンツェ近郊で農家に民宿、大歓迎を受ける

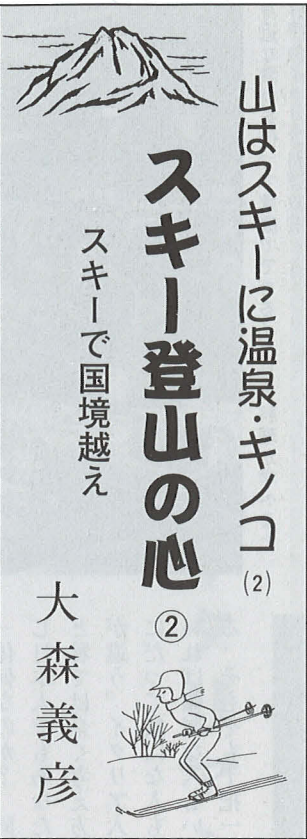
ば、できるだけ自分自身を磨きあげた上で、と付け加えたい。どんなに流暢に言葉を操ろうと、地球上どこに行っても結局最後にモノをいうのは、その人自身の教養なり、品性なり、人間性そのものであるから。さあ皆さん、「イタリア人」を捜しに Buon viaggio! (よき旅を)

（いしかわけいこ・イタリア同好会・高知副会長）

身近な素材を使って家庭でできるイタリア料理が学べる好評のイタリア料理教室







山はスキーに温泉・キノコ(2)

# スキー登山の心 ②

スキーで国境越え

大森義彦

マッターホルンのイタリア側基地  
チェルビニアからケーブルでプラト  
ローザに上がつて山小屋に泊まり、  
翌日ブライトホルン(四、一六四)に  
登ることにした。

天気は素晴らしい。山腹には数十  
人の人影が見えるので、雪が荒れな  
いうちに滑りたいと思って何人も  
人を追い抜くが、もう前日までのシ  
ュプールでこぼこである。

七年振りのブライトホルン頂上へ  
は難なく到着。これまでに数人の人  
が滑降して来たが、上は雪が硬く、  
中間部からは雪面が荒れているか  
ら、皆かなり押さええている。

当初はゲレンデを滑ってスイス側  
のツェルマットへ下りるつもりだっ  
たのだが、頂上からは東のポルーシ  
エ(四、〇九二)やカストローレ  
(四、二二八)に人影が見えるので、  
そこまで行ってみたくなくなってしまっ  
た。

そこで登り口へ引き返して、イタ  
リア側につけられたカストローレ方面  
へのシュプールに合流する。ポルー  
シエを回り込む時、戻って来る人多  
数に会い、うち一人にカストローレに  
登ったのかと聞くと「そうだ。あと  
一時間だ」と答える。

今からでは時間が足りないようだ  
し、その上天気は下り坂で、イタリ  
ア側はガスに閉ざされてしまった。  
彼らの何人かに尋ねると、皆ツェル  
マットへ下ると言うので、カストロー  
レは断念してその後をついて行くこ  
とに決める。(なお、それから八年  
後にポルーシエとカストローレに登る  
機会を得た。下から見上げるポルー  
シエはポツテリした雪山だが、頂上  
直下は岩場になっていて、太いロー  
プと鎖を伝って登る難所のあるのが  
意外だった。)

ブライトホルンとポルーシエの鞍  
部まで戻り、そこから遥か下のゴル

ナー氷河に向かつてシュヴェルツェ  
氷河に滑り込む。二十人ぐらいが固  
まっている最後尾についた。まった  
く予想外のコースだ。初めは広く緩  
やかな斜面だが、雪はやや重く、曲  
がるにはちよつと力を要する。

下るにつれてクレバスが多い急斜  
面になり、自然に幅一から二層の  
トレールに人が集中する。クレバス  
のすぐ横を急カーブしたり、横滑り  
したりで、ちよつとでもズレるとク  
レバスにはまってしまうような所が  
しばらく続く。思わぬ所で人が立ち  
止まっていることがあるので、うん  
と離れて滑ることにした。

急カーブを曲がると目の前に人が  
止まっていて、なんと高度差は数層  
だが、アップザイレン(ロープを伝  
って下りること)で下っている。幸  
い前の人のザイルを使わせてもらっ  
て下降する。降りた所でしばし休ん  
で間を空け、以後は前後に人影のな  
い中を一人で下っていく。

モンテローザヒュッテの下あたり  
から、広く緩やかとなってクレバス  
は消える。ようやくゴルナー氷河本  
流である。今度は直滑降ばかりだ。  
次第に雪が少なくなり、前をよく見  
ていないと地肌に出合ってしまう  
ことになる。最後谷が狭まって急斜面と  
なり、その下で雪が切れていたの



カストローレ基部よりイタリア側を望む

これが末端モレーンであることを知  
る。板を担いで岩がゴロゴロ堆積し  
た間を下る。

谷底に下りてガラ場の踏跡を辿る  
と、遊歩道に出る。次第に道が広く  
なり、二十分ぐらいでクライネマッ  
ターホルン駅方面への中継点フリー  
のケーブル乗り場に出た。これよ

りケーブルでツェルマットに下って、  
七年前に泊まったことがある電車の  
駅前のホテルバーンホフへ。ここは  
自炊ができ、部屋もドミトリ(相  
部屋)があつて、しかも隣はスパー  
ーマーケットという格好の宿だ。  
(おもしろよしひこ・高知大学)  
(教育学部教授)

## 民俗雑記帖6 いざなぎ流

梅野光興

この三月一日から四日まで、物部  
村でこれが最後ではないかといわれ  
ている「いざなぎ流」の祭りが行わ  
れる予定である。原稿を書いている  
今も、県外の研究者や関心のある人  
からの問い合わせが続いており、お  
そらく四、五十名あるいはそれ以上  
の見学者が集まるのではないかと思  
われる。

いざなぎ流は、物部村周辺で伝承  
されてきた民間信仰である。物部村  
の奥地では、村の氏神にしろ、家に  
まつられている天の神やオンザキ様  
にしろ、山の神にしろ、今でも神々  
の祭りを行うときにはいざなぎ流の  
太夫を雇う。また、害虫が畑に発生  
した場合や病人が出たときも、かつ  
ては太夫がいなくては事が始まらな  
かった。

日月祭の湯神楽 (高知県物部村別役  
津々呂・小原台太郎家)

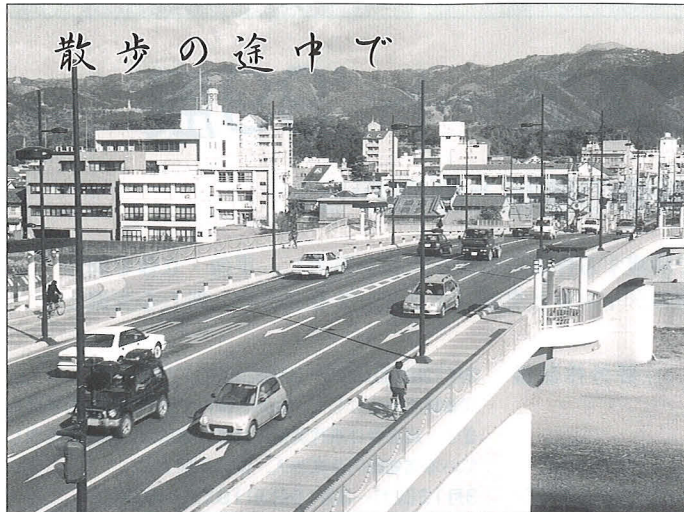


いざなぎ流の太夫たちは、ふだん  
は農林業に従事してお  
り、村人の求めに応じ  
て祭りや祈禱にたずさ  
わってきたのである。  
神祭りの際は、細長く  
切った紙をたくさん張  
り付けた笠をかぶり、  
祭文という長い物語形  
式の文句を唱え、神と  
交信する。長いときに

は、一週間から十日間もひとつの祭  
りは続き、一見して今風のものでは  
ない。  
これまでの研究では、古代の陰陽  
道との関連、祭文と中世の御伽草子  
との関連、戦国時代の年号をもつ仮  
面の存在などが指摘されており、い  
ざなぎ流は(そのころいざなぎ流と  
呼ばれていたかどうかは定かではな  
いが)中世末には物部に定着してい  
たのではないかと推測されている。  
かつては日本各地に同様の民間信  
仰があつたようだが、近世から近代  
にかけての長い年月の中で変質ある  
いは消滅してしまっている。現在こ  
れだけまとまった形で残っているの  
は、物部だけといって良いだろう。  
いざなぎ流が日本中から注目を集め  
る所以である。  
だが、そのいざなぎ流も、激しい  
過疎と太夫の後継者難などから消滅  
の危機に瀕している。今回祭りが行  
われる市宇も集落の存続すらあやし  
い状況である。  
文化に盛衰のあることは、これま  
でも常に繰り返されてきたことで、  
そのことは仕方のないことかもしれ  
ない。しかし、四百年以上も伝承さ  
れてきた貴重な文化遺産が、私たち  
の目の前で消えていくのを見るのは  
やはり残念なことである。

同じことは、高知県のどの町村で  
も起きている。七年前に見学した須  
崎市鳴無神社の神踊りを再び見たい  
と思つて問い合わせたところ、この  
二、三年は諸般の事情で中断してい  
るとのことであつた。  
これらの祭りや芸能は、おそらく  
初めは中央の祭式や芸能が地方に流  
れ込んで始まったものだろう。しか  
し数百年も伝承されるうちに地域に  
根づき、村ごとの特徴をもち、真の  
地域文化になっていったのである。  
そこには、その土地で生まれ、生き、  
そして死んでいった人々の思いが刻  
まれているような気がする。その祭  
りの消滅は、地域の個性の顔の消失  
につながっていくように思える。  
いざなぎ流の太夫の言つた「日本  
のどこでもいいからいざなぎ流の伝  
承を残しておきたい」という言葉が  
思い出される。  
私たちにできるのは、現在の伝承  
を見て、古老の話を聞いて、記録す  
ることぐらいだろう。しかし、何か  
が残されていれば、私たちはその資  
料をもとに過去の人々と対話しなが  
ら、未来をつくっていくことができ  
るかもしれない。そのためにも語り  
伝えたい。人々の「生のあかし」を。  
(うめのみつおき・高知県立歴史)  
(民俗資料館主任学芸員)





## 散歩の途中で

月の瀬橋は、中心市街地と南部地域を結ぶ重要な幹線道路である。下流側にバルコニーが2カ所、上流側に8.4mもの広い歩道があって、テラスやベンチなども設置され、安らぎとくつろぎの空間を創出している。昭和30年に初めて木橋として架けられたが、築屋敷の「築」と河ノ瀬の「ノ瀬」を合わせて「築ノ瀬」とし、橋から見た月の眺めの美しさから「月の瀬橋」と地元の方によって命名されたそうである。橋の北西詰めには水難よけの水天宮がある。

## 風俗

### ひろめ市場

昨年の暮れに、高知新聞が募集した「県民が選ぶ10大ニュース」では、惜しくも次点になったが、それでも、この市場に寄せられる県民の関心の高さが窺われる。

ここ数カ月、自由広場のピアホルルの、一段高い止まり木に陣取って、眼前に展開

昨年10月に開場して以来、いつかこの市場のことを書いてみたいと思ってきた。

はからずも、前号の本欄で、かつての「老朽木造住宅が密集したひろめ屋敷」と、「最新の観光スポットに変貌を遂げたひろめ市場」の、対照的な姿が紹介された。

身体障害者用のトイレも、広ひろとして気持ちよく、設備にも配慮が行き届いている。

ここでは、ノーマライゼーションが、すでに日常化しているのが、肌で感じられる。

この出会いの広場を創案し、その牽引力として献身している、岩目一朗理事長の、夢と情熱とエネルギーに乾杯！

(念)

される、さまざまの人間模様を眺めていると、半日座っていても飽きることがない。

ここには、外国の街の広場の屋台のような解放感がある。

誰もが、自分の好きなものを好きだけ選んで、目の前で調理されたものを、飲み食いできるのが嬉しい。

多数の身体障害者が、車椅子で自由に出入りして、活き活きと、買物や食事を楽しんでいるのも喜ばしい。

## 幕末の青春

—坂本龍馬の生涯—  
山本 大 著



四六判・168頁  
本体価格 1,165円

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分りやすく描いた、子どもから大人まで親しめる屈指の龍馬伝。

## 土佐弁 土佐日記

土居 重俊 監修  
高知市文化振興事業団 編



B6判・上製本・130頁  
本体価格 971円(第2刷)

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

## 珍聞土佐物語(上・下巻)

—五十人の語り部たち—  
依光 裕 編著



四六判  
③392頁 ④408頁  
本体価格 各巻1,553円

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。

## 今号の表紙

「花咲く頃」 西村洋一

春は大好きな季節です。厳しかった冬がゆっくりと退いて、周りが次第に春めいてくると、つい嬉しくなります。

不思議なもので、楽しい気分ですと、何かいいことがありそうな予感もしてきます。そんな春の穏やかで、のんびりした時間の流れの一端でも感じてもらえたら幸いです。(にしむらよういち・身体障害者療護施設オイコニア入所)



高知を撮る 中須賀の子供達 (昭和59年 中須賀町) 坂本 巖

第14回写真コンテスト入賞作品

質屋さんの店先でカメラを構えていると、ギターを持った店のご主人や近くで遊んでいた子どもたちも集まって、ハイポーズ。子どもたちはもう成人式を迎えた年齢だろう。

本来は「節供」と書く。文字通り、一年の節目目に山海の珍品を神々にお供えて、自分たちもいたいだいた年中行事である。主なものが、一月七日から九月九日まで、隔月に、しめて五回、五節句という。

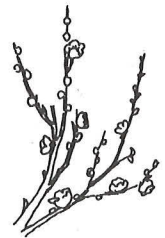
とりわけ、華やいだお祭りが雛の節句である。季節は春、桃の花の色も、ぼんぼりの明かりも、心をほのぼのとあたためてくれる。

雛節句が近づくと、遠い昔の甘酸っぱい思い出が、記憶の底から甦ってくる。

小学校一年生のとき、受け持ちの先生と二人、クラスの女の子の家の雛祭りに招かれた。ひとりっ子の私にとって、雛祭りそのものが初体験だった。母のいいつけを守って、きちんと正座していただいた白酒は、甘くてあったかかった。中国での泥沼の戦争が始まったのは、それから四カ月たった七夕の節句だった。

腺病質で、ろくに学校にも行かず、内気だった私は、もっぱら彼女だけと遊んでいた。格別「不適切な関係」が

## 節 句



### 風俗歳時記

あつたわけでもないのに、仲のよい二人を見て、クラスの連中ははやしただ。

やがて、父の転勤で私は外地の小学校へ。そして、戦災と敗戦。彼女とは音信不通になった。戦後三年して彼の地を訪れた時、彼女の家の焼け跡には夏草が生えていた。聞くところによると、彼女は戦争で両親を失い、姉と二人で熱海の進駐軍で働いているとのことであった。その後の消息はわからない。

あれから半世紀、またぞろキナ臭いにおいがただよってくるこの頃である。もう悲劇はまっぴらである。頑固に、一途に、いくさを拒むしかあるまい。

毎年、雛節句には変わり雛が話題をよぶ。たぞろキナ臭いにおいがただよってくるこの頃である。もう悲劇はまっぴらである。頑固に、一途に、いくさを拒むしかあるまい。

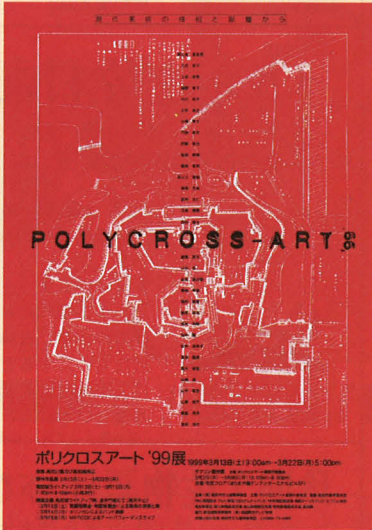
(略)



# ポリクロスアート '99展

(現代美術の様相と断層から)

県内外の現代美術の第一線で活躍する作家の多様な作品を展示し、平面・立体を問わず、また、美術だけに限らず他のジャンルと交差(クロス)することで、新たな交流と刺激を生み出します。



- (1) 野外作品展 3月13日(土)9:00~3月22日(月)17:00  
高知城を中心にして、高知公園内で野外作品展を開催します。出品者は現代美術の分野で意欲的に作品を発表している高知県内作家29人、県外作家3人。
- (2) ライトアップ 3月13日(土)~3月15日(月)19:00~20:00  
高知城を巨大な立体作品と見立て、ライトアップします。
- (3) 関連企画 ① 3月13日(土) 雅楽の演奏と舞:繁藤雅陽会・南国雅龍会  
② 3月14日(日) バンド演奏:キリンカン  
③ 3月15日(月) 音楽パフォーマンス  
高知城のライトアップに合わせて、追手門前で3つのパフォーマンスを行います。
- (4) タマリン遺作展 3月3日(水)~3月8日(月)10:00~18:00  
市民フロア(はりまや橋・デンテツターミナルビル5階)  
ポリクロスアート展プレ企画として、同実行委員会主催により、昨年11月に交通事故で亡くなられた漫画家タマリン(玉造ヨシロー氏)の遺作展を開催します。

主催 (財)高知市文化振興事業団  
主管 ポリクロスアート展実行委員会  
お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団 (☎ 0888-73-4365)

## 外崎光広 著 土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。  
A5判・上製本・四二四頁  
本体価格 二、七一九円

## 土居重俊・浜田数義 編 高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。  
A5判・上製本・七三六頁  
本体価格 六、〇〇〇円

## 中西安男 著 やっさんの わくわく動物記

野生動物の生態や習性・個性がいきいきと描かれ、読み物としてももしろいだけでなく、手軽な動物ガイドブックとしても最適。  
A5判・一九二頁  
本体価格 一、八〇〇円

## 岡林清水 著 高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く「旅のなかの文学史」ともいえる文学案内。  
四六判・二七八頁  
本体価格 一、七四八円

## 山岡浩 著 高知の農業

地域農業・農産・農に生きる人々をつぶさに訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的な産地づくり事例を紹介。  
A5判・二四八頁  
本体価格 一、八〇〇円

## 高知県緑の環境会議森林研究会編 高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。  
B5変型・二二八頁(第二刷)  
本体価格 二、四二七円